イラン革命とイスラム教

大阪外語大学教授　加賀谷　寛

固定的に考えるのは間違い

最近、イラン革命が起ったばかりだが、イラン革命は、イスラムの力が起こしたという単純な見方が行なわれている。果して、イランの革命は、イラスムがあって起こったのか、またその関係はどうなっているのか、考えてみたい。

イスラムは、千三百年前に興った宗教である。その後、中世までは、イスラム文明は華やかなサラセン文明という名前で呼ばれた。中世ヨーロッパよりは、もっと進んだ文明の世界であったと思われるが、近代以降はどうもイスラムの世界は停滞したように考えられてきた。

つまり、イスラムは、ヨーロッパが世界を支配すると、消えてしまう宗教であると思われてきたのではないか。これには、確かに二つの面が考えられる。一つは停滞した遅れた社会、宗教を代表する面も否定できない。今日、イスラムの世界には、いろいろ異った政治体制の国がある。経済的にみると、おしなべて発展途上国である。日本のように急速な近代化が行なわれなかった。そこで、近代化の阻止要因としてイスラムが掲げられてきた。そういうイメージがまだ強く残っていると思われる。

メジャー後退で日本も関与

ところが、今度のイラン革命が起こると、一転してイスラミックパワーという言葉がジャーナリズムで脚光を浴びた。そして、まるでイスラムは常に躍動して、ダイナミックな変革の力になり、革命とか政治的な自覚に結びつけられてしまう。その一方のいずれかにイスラムを結びつけて固定的に考えるのは間違いではないか。イスラムは、その両方に時に応じて結びつくとみるべきであろう。

次に、イスラム世界と日本との関わりだが、これまで、ほとんど直接に交渉したことはなかったように思われる。日本人にとっては、もっとも未知の宗教ではなかろうか。それはなぜか。イスラム世界の中でも、石油の出る国と出

ない国がある。イラン、ペルシャ湾岸のアラビア語を話す大小の国から日本は石油を供給してもらってきた。しかし、これまで石油の供給を握っていたのは、石油を自分の所から産出する国ではなく、国際的な石油資本（メジャー）だった。

これが一九七〇年代の途中まで続いていた。その場合、日本はメジャーから石油を買えばいいわけで、石油産出国と直接交渉する必要はなかった。アラブとかイランの政治に日本がコミット（関与）する必要はなかったのである。

ところが、中東諸国が一九六〇年代の終わりぐらいから、石油を含めて資源を自分達の主権に属するのだと主張しはじめた。石油の供給についても、今度はイランとかアラブの国が非常に大きな発言、主権をもつように変わってきた。それだけメジャーの力が後退したといえる。

すると、日本はいやがおうでも、中東の国々と直接関係を持たざるを得ない状況に立たされた。しかし、日本はできるだけ政治的な関りは後回しにして、経済的な関係だけでやっていこうと思ってきたのである。こうした状況の中で、日本が政治的に解決をせまられた問題が一つある。それはパレスチナ問題である。これは国連でいつも取り上げられてきた。パレスチナ問題が解決できないと、日本とか西ヨーロッパに対して石油の供給をやめるとアラブ諸国は主張した。石油を戦略的に使い出したわけである。これが、一九七三年末の石油危機といわれるもう一つの側面である。この時、日本は非常にうろたえた。記憶に新しい石油危機がきっかけとなって、ようやく日本でもアラブから石油を買うにはパレスチナ問題の理解がないといけないという自覚を持つにいたったのである。

西欧側に片寄る中東の報道

ところが、中東関係の報道では、どうしても西ヨーロッパ側に片寄ってしまう。それでイラン革命とか、イラン＝イラク戦争について、イラン、イラクの生の声が一見客観的にみえる西ヨーロッパの通信と対等なかたちで日本には入ってこない。たとえば、アメリカ大使館の人質問題。これは国際法に違反しているのは確かだが、だからと言ってイラン側の言い分を全く聞かないで、ただイランが悪い、だけが日本では通ってしまう。しかし、やはりイラン側は何を考え、何を訴えているのかを把握していかないといけない。アメリカにとってイランを攻めて軍事的に潰すのは容易であろう。が、たとえば、ホメイニのイランを潰したとしても、やはり同じような革命が繰り返して起こるのは必至であろう。従って、これを繰り返すのは賢明ではない。

日本で無理解のイスラム教

ところで、イスラム教について、日本ではほとんど理解

されていないようだ。日本人のイスラム教徒は、自称五万と言うが、私は、千単位だと思う。日本人のイスラム教徒がわれわれの身近なところにいないので、イスラムについての無理解は、どうしようもない事実なのだ。だから、勝手に想像して、イスラムはこういうもんだと自分達で思ってしまう。

日本の宗教とイスラム教の違いは大変重要な問題だ。日本の宗教、神道、その他は、はっきりした形がない。ところが、イスラムは形がはっきりしている。教義がはっきりしている。宗教と世俗の世界が別れていない。そこが大きな違いであろうと思う。

マホメットは、七世紀にイスラム教を説いた。彼には、神の啓示を伝える予言者、もう一つは教団の指導者、政治家という二つの面がある。予言者だが、社会の真っただ中にいて教団を確立した。イスラムは、初期キリスト教のような宗教と全然違って、教団自身が国家であり、国家権力でもあった。これは、なかなか現代の日本人の頭では理解しにくいことであろう。宗教と国家、社会の関係は、近代ヨーロッパ、近代日本では分離の状態にある。イスラムにとって宗教は、政治社会の場面にすべて実現しなくてはいけないと考えている。つまり、イラン革命にしても、イスラムを現代に実現するんだという考え方が底流にある。ここでは近代国家とイスラムは分離しないわけである。

このように国家と宗教が分離しない国はイスラム世界に多い。例外的には、第一次大戦後にオスマン＝トルコが分解してできたトルコ共和国ぐらいのものである。

第三世界の革命に共通する

次に、自分は何者であるかという中東の人々の帰属の問題。日本人は「お前は何か」と言うと「日本人だ」で終わってしまう。むこうでは、自分はどの民族、宗派、グループに属しているかが大問題なのである。しかも、民族を超えて、イスラム教徒であるということが、直接兄弟の関係にもつながるのである。イランを例に取ると、一番広くはイスラム世界に属し、中間的にはイラン国民とする意識がある。一番身近な形では、自分はどこそこの利害関係を直接共にする小さな集団に属するのだとなる。

ところで、イラン革命で民衆は、三つの革命の課題を掲げた。一つは植民地、反帝国主義。わかりやすく言えば反米。二つ目は国王の専制支配からの脱出、民主主義の要求。三つ目は反搾取。これらをみてもイラン革命は、第三世界のそれに共通していることがわかろう。そして今度の革命は、突然起こったのではなく、歴史的にみて、百年間の戦いの上に起こったものだということだ。したがって、イラン革命がイスラム教から直接でてきたのではなく、民族問題、イランへの外からの支配に対する解放、革命であるこ

とを忘れてはならないと思う。

しかし、これだけでは政治的な説明で終わってしまう。そこに人間の内面的な問題（宗教）も考えていかなくてはならない。なるほど、彼らは石油収入が急に増えて、経済的に豊かになったかも知れないが、といって近代的なヨーロッパ人にもなれないし、壊れた伝統社会にも戻れない。それならば、どこへ行って、何を求めたら良いのかと悩み始めたのだ。そこで人間性の回復をイスラムに求めたのだと考える。イスラムは、彼らの最後の拠点なのだ。アメリカとか高度に発達した文明に対して、彼らはとても、ついていけないと思い始めたのであろう。

イランの場合、宗派はイスラムの中でもシーア派でまとまっている。厳密にいえば、シーア派の中にもいくつかの派があり、イランは十二イマーム派で、十二人のイマームを立てる。教祖マホメットには男の子がなく、彼の後継ぎが問題だが、イスラムでは、マホメットの後の予言者を認めていない。そうしないと、また新しい宗教が出てきてしまうからだ。そこで、指導の面で、これを継ぐのがカリフとなっている。しかし、カリフは予言者の役割りは持っていない。

ところが、シーア派ではカリフは教団の代表者だけではなく、精神的、宗教的な役割りも持っている。が、それでも予言者ではない。これをイマームといってるのだが、マホメットの従兄弟にアリーがいて、この血統にハサン、フセイン兄弟がおり、このフセインの系統で十二人のイマームを立てている。それで十二イマーム派と言うのだ。イマームを立てることを除けば、カリフを立てる正統スンニ派と異なる点はない。

ところで、最後のイマームが死んだことになっているが、それは死んだのではなく、〝隠れている〟のだ、と彼らは主張している。さっきもいったようにイスラムは、宗教であり、律法（政治を動かす根本）でもある。そして律法は神の意志の体現だ。法学者は神の意志を譲るものだ、とされている。その法学者がイマームの代理になると説くのがシーア派の指導者ホメイニである。ホメニイ自身、法学者だが、このような考え方はスンニ派にはない。しかし、今までイランでは法学者は政治から離れていた。しかし、法学者が権力を握らなければだめだとするホメイニの考え方は、今回の革命で初めて出てきたものである。

そのほか、イランの西欧的インテリ層にもホメイニと違った考え方も生まれてきている。それは、ロマンチックなイスラム解釈が革命の中で、囁かれたことだ。それには、人間性の回復をイスラムに求めていることである。

また、イラン民衆運動の特色は、底辺から律法学者、僧職を立てることだ。これがイラン革命百年来の図式である。ホメイニの場合でも、彼が号令をかけたのではなく、左か

ら右までも含むいろんな政治勢力が国王打倒のために、彼を立てたのだと考えられる。どうも新聞では、ホメイニは狂信的で、リベラルを弾圧したりするといわれがちだが、イランの民衆にとって必要なのはホメイニなのだ。彼は、革命を守るシンボルでもあるわけだ。

今回のイラン革命は、既成政党の革命準備が充分できていない段階で、大衆運動によって一挙に燃え上がってしまった。そこに、非常に素朴なイスラム的スローガンが表面に出てきた理由が求められる。ホメイニの言葉に「抑圧者」と「被抑圧」というのがある。抑圧者とは外の力としてアメリカ、直接的には国王。被抑圧者はイスラム世界の大部分。具体的には、被抑圧者の問題とはパレスチナ問題だと思う。

これから日本も、利益を守りながら、これらの問題と付き合っていかなければならない。日本も、今まではアメリカの後についていれば石油を買えたかもしれないが、現在はそういう状態ではない。中東で、アメリカは非常に大きく後退してしまった。日本も直接、彼らと関係を持たざるを得ないところまできているのだ。イスラムの理解に関しても、日本人は誤解を恐れずに進んで取り組んでいかねばならないと思う。

（本稿は研究講座で発表したもの。日蓮宗新聞より転載。）